

愛情のシャワーを 浴びせるなかで

元日雇い労働者と簡易旅館の立ち並ぶ街、山谷。ここに、私は七年前、妻の美恵と在宅ホスピスケア対応型住宅を開き、「きぼうのいえ」と名づけました。「きぼう」ならず「むぼう」とさえ言われたこともあります。けれども、死を前にして、身寄りも病の身を休める家もない人たちの分かち合いに願いを込めたのです。

入居者の人生をひも解いていくと、いわゆる「自業自得」でホームレスになったなどとは、けっして思えなくなります。彼らとふれ合うには宗教的にならざるを得ませんが、といって何かを教え諭すわけではなく、さりげないふれ合いからにじみ出る何かが伝播すればいいと思うのです。

スタッフと、それこそ「愛情のシャワー」を浴びせるようにふれ合ううちに、入居者がふっと笑顔を見せる瞬間があります。それを逃さず、「いまの笑顔、よかったね。あ



やまもと・まさき
1963年、東京生まれ。上智大学神学部卒業後、「NPO法人ファミリーハウス」の事務局長を務める。01年、社会の最底辺に生きる人のためにホスピスを建てるため、看護師の妻の貯金を元手に銀行から資金を借り、各地のキリスト教教会やボランティアの後援を得て、02年、「きぼうのいえ」（全21室21床）を開設。著書に『東京のドヤ街山谷でホスピス始めました。』など

仏の声を聴く 「きぼうのいえ」施設長 山本雅基

りがとう」と言う。すると、「いや、こっこそ、ほんとうにありがとう」と返ってくることがあります。

時には、入居者が私たちの真心を試すことがあります。そんなときは、「あなたはわがままだと思います」と毅然と言いつちまします。やさしい妻も、「それよりも人に感謝したらどうでしょう」と言うことがあります。相手の耳には痛い言葉でも、ほんとうに心を通い合わせるためには、言うべきことがあるんですね。

そんな人助けの思いが芽生えたのは、小学生のころ、捨て犬を連れ帰って親に叱られたところからかもしれません。

日本でもホスピス運動が高まりを見せたのが大学生のころで、哲学専攻の私は難病と闘う子どもや小児がんの子どもの死と取り組みました。やがて、身寄りのない高齢者は、やはり一人ぼっちで死んでいくのだろうかという思いが、マザー・テレサの「あなたのなかの Kolkata を求めなさい」という言葉と結びつき、家なき人の終のすみかを建てようと思ったのです。昨年三月に、念願だったインドの Kolkata に、マザー・テレサが建てた「死を待つ人の家」を訪問できました。「きぼうのいえ」は、まさにその日本版だと思います。

娑婆の匂いのなかで 余生を生きる

「きぼうのいえ」には、いい意味で楽天主義的な雰囲気があります。末期がんの入居者がスタッフと、「銭湯に行ってきた」とか「ちよっと、もんじゃ焼きに行ってます」とか「カラオケに行つて、サイダーで乾杯してきました」とか。点滴スタンドを転がしてパチンコに出かけたものの、玉が出て、十時になっても帰るに帰れなかったという人もいます。たしかに、「それは、患者に家族がないからできるんだよ」と言われるとおりかもしれません。

当初、「山谷でホスピスを始めました」と言う、居住環境や専門的な医療措置について問われたこともありましたが、それでも私は、街中の匂いを浴びて生活したほうがいいと思いました。私もかつて規律の厳しい修道院で過ごしたことがあります、そこから出たとき、競馬新聞を広げる人がいたり、タバコの匂いがする光景に「娑婆っていいな」と心底思いました。

人は立っていれば転ぶこともあります。そんなふうのんびり構えているので、オムツ交換は何時間おきにチェックしなければなどというシステマ的な看護体系はあり

ません。管理の網を張り巡らすと、人間的な営みが奪い取られてしまうと思うからです。ナースコールが鳴れば、「鳴らせるのは生きる力があるからだよ」などと言う。そのほうが、かえって温かなふれ合いが生まれる気がするんですね。だから、妻が入居者とシャボン玉をふくらませていたり、女性スタッフがダンボール箱で、みんなで飼っている猫の家をつくったりと、一緒にな

神仏の世界に 身を安んじて投げ入れる

七年間で八十二人の入居者を看取りましたが、だれも「死ぬのがいや」「怖い」とは言いませんでした。当初は、世間への憎しみに、死んだほうがましだと思っていたかもしれませんが、「きぼうのいえ」での生活に、平穩のうちに亡くなっていきました。

ある精神医学者が、人生の辛酸をなめてきた人は、運命という名の辛酸を受け入れることに慣れている。だから、死も、心ならずとも受け入れていけるという意味のことを言っています。そんななかでも、人間は、愛情を十分に得られたときに、神仏の世界に身を安んじて投げ入れる境地に達するのではないかと思います。

山谷の街は、母性愛が救う

「この世に生を受け、学び、またあの世という故郷に帰っていく」。そう思うから、人生の最終章を、最良の状態で迎えてほしいのです。「よくがんばったね。お疲れさまでした。これであなたの学びのときは終わります。どうぞ浄土へ帰り、今生こんじょうでの学びを大切にしてお過ごしください」という思いです。

昔のお産は、助産師さんに頼みました。日常の営みのなかで生まれ、そして死んでいく。それはワンセットなんです。が、いまは誕生と死の部分がどこかで切り離されてるんですね。

お豆腐屋さんのラッパの音が「プー」と聞こえ、子どもが遠くで遊んでいる声や、お勝手から食器をガチャガチャ洗う音、隣の部屋から吉本新喜劇のお笑いが聞こえてくるなかで、入居者たちは、「さよなら、またね」と去っていきます。それが、山谷のホスピスの看取りの光景です。

そして、もう一つ。山谷の街には、さまざまな思想が入り込みました。けれども、どれ一つ、ここに住む人たちの魂の救いには至りませんでした。何よりも、この街では女性の持つ母性のような愛が、独り身の、凍土のような男の心を溶かすのです。まさに「母性は山谷を救う」です。